令和四年度

国語問題（L）

前期日程

〔注意〕

1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。

2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。

3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十四ページである。脱落している場合はただちに申し出ること。

4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。

5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。

6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。

7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。

8 問題冊子は持ち帰ること。

Ⅰ

次の文章は、「契約モデル」ではなく「傷つきやすさを避けるモデル」を用いて責任を論じるロバート・グディインの議論を紹介するものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

グディインの責任論の出発点は、わたしたちは、身近な家族、友人に始まり、ビジネス上の契約相手、あるいは、ある価値観や領域を共有し合う同胞に対して、「特別な責任」を負っているという道徳的な直感をもっている、という事実である。かれは、その直感を生じさせているじっさいの関係性を注視することで、〈わたしたちはなぜ互いに責任を果たし合うのか〉といった、さまざまな関係性に共通する責任の意味を示し、わたしたちが社会を構成するのは、そのようにして示された責任をよりよく果たしあえる共同体を築くためである、と論じる。

ここで、かれが義務と責任を区別していることに注意したい。義務とは、ある行為を命じる意志を重視し、その結果については問わない義務論的な倫理であり、責任とはある結果を生じさせる帰結主義的な倫理である。わたしたちはすでに、自分自身に命令を下す義務論的な倫理がいかに多くの感情や行為を忘れさせ、社会における関係性から切り離されたものかを知っているはずだ。グディインによれば、義務は義務を負う者に直接ある行為をするよう命じるが、責任は、責任を負う者につねに行為を命じるものではなく、むしろ、ある特定の成果がもたらされることを引き受けるよう命じる。(a) たとえば責任の場合は、教師が学生によりよい教育効果をもたらすために、ある特定の講義については専門の講師を雇い入れることによって、自らが直接的な行為をなさなくても果たしたことになる。また、義務は、義務を果たすか否かの二元論的な倫理であるが、責任は程度の問題であり、多数の者たちと分有可能で、かつ責任者に多くの裁量があることを特徴とする。

さて、議論のなかでかれが批判の標的とするのは、伝統的な契約論、すなわち、わたしたちがある特定の他者や関係性に対して「特別な責任」を負うべき理由は、自発的に取り交わした契約がもたらす結果に対しては義務を負わなければならないからだ、という考えである。かれは、この契約論的な責任論に対して、ヴァルネラビリティ・モデル、すなわち、「傷つきやすさを避けるモデル」を提起する。

グディンによれば、わたしたちが特定の他者や関係性に「特別な責任」を負うべきなのは、他者とともにおかれたある関係性のなかで、ある特定の他者が、わたしたちの行為や選択に左右される、すなわち傷つきやすい立場に置かれるからである。また、この場合の関係性は、自発的に取り結んだ関係性だけでなく、偶然に否応なくおかれた状態における他者との関係性をも含んでいる点に注意しておきたい。

かれの責任論は、つぎの二点を強調する。第一に、家族関係に代表されるような「特別な責任」は、より公的な場における責任と比べてなんら特別な責任倫理を表しているわけではない。家族における責任が特殊な責任のように思われてきたのは、責任が個人の自発的行為から生じる、という(b)契約モデルに囚われているからである。そうではなく、ヴァルネラブルという用語そのものが示しているように、つねに責任は関係性のなかでこそ生じていると考えなければならない。したがって、責任は通常考えられているほどに、責任を負う者によって一方的に担われるものではないであろう。文脈に応じた実践を積むなかで、当事者は互いに呼びかけと応答の仕方を学びあいながら、それぞれの立場が流動的でありながらも固定され、だからこそ取替えのきかない「特別な責任」が関係性のなかで立ち現れてくるのである。

関係性のなかから生じ、関係性のなかでその重みも変化する、といった関係的な責任理解からすれば、ビジネス契約における当事者の責任と、子どもに対する親の責任とが、一つの責任論の中に包摂される。すなわち、両者の違いは、その関係性の違いから発する当事者間の相互依存の在り方とその程度にある。一方の当事者の行為に左右される、傷つきやすい相手が被るであろう危害を生じさせない責任という意味においては、同じ内容の責任を負っているのである。

第二に、(c)そうだとすれば「特別な責任」はやはり、親密な関係性がなければ果たし得ないのではないかという点について、グディンはつぎのように論じる。契約モデルは、ある結果を生む行為を最初にした者が、行為の帰結についても責任を負うべきだとする、因果論的な責任モデルをとる。他方、「傷つきやすさを避けるモデル」は、ある行為が他者に及ぼす結果の重さを勘案する帰結主義をとる。なぜならば、このモデルが重視するのは、傷つきやすい立場に置かれた者が被る危険性のある「危害」をいかにして避けるか、という意味における責任だからである。ここでは、だれが「傷つきやすさ」という状況を惹

起したのかは問われない。ヴァルネラブルな立場にある者にとってみれば、その責任を誰が担うかは、状況に左右される二次的な問題であり、まず重要なのは、危害を避ける、という結果がもたらされることだからだ。

すなわち「傷つきやすさを避けるモデル」は、初発の行為はどうあれ、最終的にその責任がもっともよく果たせる者が果たすのが合理的だと考える。たとえば、因果論的なモデルでは、母親や父親は子をもつという決意を最初にしたのだから、その行為の帰結としての子の養育に責任があるとされるが、「傷つきやすさを避けるモデル」からすれば、どのような経緯があったにせよ、もし母親や父親が最終的にその子の養育の責任が果たせるのであれば、彼女たちが「特別な責任」を果たすのが合理的だとする。だが逆に、子を養育する責任を、もし母親や父親が最終的に果たせない場合は、なんらかの形で、子に対する危害を避けるための責任を果たし得る者が果たす方がよい、と考える。

たとえば、グディンは、別の著作で福祉に依存しなければならない母親たちを社会的コストとして批判する者たちに問いかける。

> いったん子どもたちがこの世界に生まれてくれば、いったい誰が、その子どもたちを飢えさせることは道徳的に許されると真剣に論じるだろうか。他者に対する教訓として、こうした母親たちが飢えることは道徳的に適っていると、誰が本気で論じるだろうか。

かれは、飢えという深刻な危害を最終的に避けることができるのに、その対策をとらない者――この場合は、政府――の責任を問うのだ。もちろんそれは、母親のなんらかの落ち度から生じてくるような責任を免除することと同じではない。子に対する母親の責任と政府の責任は、矛盾するどころか両立し得るし、相互に補完しあうこともあるだろう。ここに、責任の第一の特徴である、(d)「分有可能性」の実践的な価値がある。

（岡野八代『フェミニズムの政治学』による）

問一　傍線部(a)「たとえば責任の場合は、教師が学生によりよい教育効果をもたらすために、ある特定の講義については専門の講師を雇い入れることによって、自らが直接的な行為をなさなくても果たしたことになる」とあるが、この例において、なぜ教師は責任を果たしたと言えるのか、責任の意味を明らかにしながら、説明しなさい。

問二　傍線部(b)「契約モデルに囚われている」とあるが、このモデルに囚われていると、なぜ家族における責任が特殊な責任のように思われるのか、説明しなさい。

問三　傍線部(c)「そうだとすれば「特別な責任」はやはり、親密な関係性がなければ果たし得ないのではないかという点」について、グディンはどのように考えているのか、「そうだとすれば」の「そう」の内容を示しながら、説明しなさい。

問四　傍線部(d)「「分有可能性」の実践的な価値」とあるが、「傷つきやすさを避けるモデル」による責任論では、なぜ責任を分かちもつことが可能になるのか、またそのことによって実際にどのような価値が生じるのか、本文中で言及される具体例を用いて説明しなさい。

Ⅱ

次の文章は、黒井千次の小説「声の山」の一部です。「僕」は父に連れられて、今まで登ったことのない山に登ります。以下はその時のことを書いたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

「お前、なにか失くして困っているものはないか？」

半コートを脱いで再び歩きはじめた父親の放った言葉が五郎を刺した。口ごもったまま答えることが出来ずに息子は足を運んだ。(1)左の手首が頼りなく軽かった。知っているのだろうか、と彼は父の表情をうかがった。

「別に……。」

今日の自分の装備で一つだけ気がかりなのは時計のないことだった。三年生になった時にようやく買ってもらったブルーのベルトのついた腕時計は今も目のすぐ裏にあるのに、一週間前から姿を消していた。机のひき出しはもちろん、本棚、押入れ、バッグをさがし、遊びに行った友達の家まできいたのだが遂に行方がわからない。――俺は中学校にはいった際にはじめて兄貴の古い時計をもらったのだ、小学生から時計を持つ必要がどこにある、と父親は五郎の要求をなかなかきき入れようとはしなかった。遊びに出かけて帰る時間を守るのに腕時計があった方がいい、とようやく母が認めたのは、家に来た友達が三人とも腕時計をはめているのを見たからだ。買ってもらった時計そのものへの愛着というより、それを失くしたことによって叱られるのが怖くていやだった。

「なにか思い出すものはないか？」

父親がどこかでみつけてそのまま黙って持っているのだろうか。二人だけのこういう場所で紛失を告げてしまった方が結局叱られ方が軽く済むかもしれぬ。曖昧に開きかけた五郎の口を父の次の言葉が遮った。

「品物ではなくて、生き物でもいいんだよ。」

五郎の予想に反して話は意外な方向に進んでいきそうな気配だった。

「生き物？」

「小鳥だとか、虫だとかもさ。」
「死んだのはいるけれどね。ほら、白い十姉妹が巣の中でさ。」
「死んだのは駄目だ。それはもう戻らない。」
「逃げたようなもの？」
うん、と父は短く答えた。父の言ったとおり短い下りはすぐ終ってまた登りがはじまっている。最初にきかれた時、腕時計のことを思い切って言ってしまった方が良かったのかもしれないという後悔が五郎の中に薄く湧きはじめる。
「権現さまにお神酒をあげてお祈りしてから鍵取八郎右衛門という人に頼むと、家出して行方が知れなくなった者や、突然消えてしまった肉親をさがし出してくれたんだ。」
「どうやって？」
「鉦と太鼓を叩きながら神社のまわりをぐるっと廻る。廻りながらさがしたい人や物の名前を三度呼ぶ。なんとかを出してたもれえーっていうふうにな。」
「そうすれば出て来る？」
「いや、呼び声になにかの反応があった時には必ず消息がどこかから知らされて、いなくなった人に会えたというよ。それでこの権現さまは有名になったんだ。」
「反応というのは、山彦とか？」
「そうだろう。」
「風とか？」
「うん。」
（中略）
「呼んでみようか？」

「……。」

「ねえ、呼んでもいい？」

「……なにを呼ぶんだ？」

「ただ、叫んでみるだけだよ。」

「……やってみろ。」

あー、と五郎は遠慮勝ちの声をあげた。竹藪のこもった空気の中に声はすぐ消えた。

「そんな叫び方じゃ駄目だ。」

きいた時は気の進まなそうな返事しかしなかったのに、今度はけしかけるような父の言い方だった。おー、と五郎は声量をあげた。前より更に反応はなかった。おーいになろうが、ヤッホーに変ろうが、山の空気はただ五郎の声を呑んだままだった。馬鹿にされたような気がした。なにかいけないことをしたような気がした。(2)急に自分がいやになって五郎は唇を噛んだ。

一番下の石垣を背にして枯草に腰をおろし、電車を降りた折に駅で買って来た弁当を開くと気持ちが和んではじめてピクニックの雰囲気になった。北を石垣に守られ、冬の日をいっぱいに浴びた南面のその場所は絶好の休息地だった。変電所とは反対側になる筈だがそちらの側でもなにか工事が行なわれているのか、時折下の方から金属性の重い音が登って来る。足下の崖のあたりから黒い鳥がふわりと浮いて空を舞いはじめる。とんびかな、と五郎が目を細めて後を追うと、カア、カア、という鳴き声がのどかに返って来る。

昼食がすみ、水筒の焙じ茶をたっぷり飲み、バッグから出したせんべいを齧りながら五郎は枯草に寝転んだ。

「いいとこだね、ここは。」

思わず声が咽喉から出た。ジャンパーを脱いでスエターになった身体にほんの少し冷たく感じる空気が快い。

「人によってはな、こんなことを言ったらしいよ。自分から姿をくらまして出て行った者がしばらくしてどうしても帰りたくなったりするだろう。黙って帰って来るのは具合が悪いから、あの山で名を呼ばれたので止むを得ず帰って来たんだという

ことにもしたんだろうって。」

五郎は目の上に指を組んだ手をのせたままで、へえ、と息を吐いた。昼寝でも出来そうなのんびりとした枯草の日溜りのことを言ったのに、父親の言葉が別の方にそれて行くのがおかしかった。弟や妹が一緒だったらここでの時間の過し方も違ったろう、と五郎は思った。けれども今は、枯草の上を転げまわったり、拾った枝で斬り合いをしたりするより、大人のようにただ横たわっていたかった。

「もう一度見てくるからな。」

父が立上って身体から枯草を払い落した。

「お宮を？　あの道？」

寝たままで五郎はたずねた。聞き取りにくい声を返して父は階段の方に歩きはじめている。

「ここに帰って来てよ。まさかいなくなったりしないだろうな。」

急になにかが立去って行くような気がして五郎は片肘つくと身を起した。

「ばかだな、ここはいなくなった人を探す場所じゃないか、逆だろう。」

愉快そうな笑い声を残して父の姿は石垣の向うにすぐ消えた。ナイフを出して枝を削ろうか、それとも「ぼうけん手帳」を読んでみようか、と物憂く考えながら五郎はまた頭を草につけて目の上に指を組む。鳥の鳴き声が横の方からきこえて来る……。

どのくらい時間がたったのかはっきりしない。まだ父は戻って来ない。五郎は草の上に起き上った。太陽の位置が少し右に動いたように思われる。日の色が微かに薄くなっている。小さな不安が自分の奥に生れているのに五郎は気づく。それはまだはっきりした形をとってはいない。冷蔵庫に似た白い扉を開く父親の姿が見える。雪の残った狭い道を石垣に背を擦りつけるようにして横這いに進む無精髭の生えた父の顔が見える。ひやりとした竹藪に足を踏み込む影が見える。鳥だろうか。(3)弱い獣のようにぴんと立てた五郎の耳に短い響きがきこえた。もしかしたらパパはなにかを失くしたのかもしれない、という考えが

突然ひらめいて五郎を掴んだ。失くしたとすれば、それは馬みたいに大きなものに違いないと彼は咄嗟に思った。向うに歩き続ける父の身体から直角に離れて遠ざかって行く白い馬をいつか見たような気がする。竹藪の中の細い道から、たった一声、その馬を出してたもれえ、と今父が叫んだのではないか。五郎は動けなかった。いや、今にも立って走り出そうとする自分を彼は必死におさえつけた。枯草に坐って、どこかから戻って来る父をここで待つことが必要なのだ、と彼は誰に教えられもせずに悟っていた。(4)その父は今迄の父とはなにかが少し違うかもしれない、そんな予感が息をつめて坐り続ける五郎の中に生れ、彼の体を下の方から静かに浸しはじめていた。

（黒井千次　「声の山」『石の話　黒井千次自選短篇集』による）

問一　傍線部(1)について、「左の手首が頼りなく軽かった」のはなぜだと思われるか、その理由を説明しなさい。

問二　傍線部(2)について、五郎が「急に自分がいやにな」ったのはなぜだと思われるか、その理由を説明しなさい。

問三　傍線部(3)において、「弱い獣のようにぴんと立てた」という表現にはどのような効果があるのか、説明しなさい。

問四　傍線部(4)について、なぜ五郎は「その父は今迄の父とはなにかが少し違うかもしれない」と思ったのか、その理由を説明しなさい。

Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

深草の帝と申しける御時、良少将といふ人、いみじき時にてありける。いと色好みになむありける。しのびてときどきあひける女、おなじ内にありけり。「今宵かならずあはむ」と契りたる夜ありけり。女いたう化粧して待つに、音もせず。目をさまして、夜や更けぬらむと思ふほどに、時申す音のしければ、聞くに、「丑三つ」と申しけるを聞きて、男のもとに、ふといひやりける。

(a)人心うしみつ今は頼まじよ

といひやりたりけるに、おどろきて、

(b)夢に見ゆやとねぞすぎにける

とぞつけてやりける。しばしと思ひて、うちやすみけるほどに、寝過ぎにたるになむありける。

かくて世にもらうあるものにおぼえ、仕うまつる帝、かぎりなくおぼされてあるほどに、この帝、うせたまひぬ。御葬の夜、御ともにみな人仕うまつりけるなかに、その夜より、この良少将(ア)うせにけり。友だち・妻も、いかならむとて、しばしはここかしこもとむれども、音耳にも聞えず。法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてなむあるとも聞えなむ。なほ身を投げたるなるべしと思ふに、世の中にもいみじうあはれがり、妻子どもはさらにもいはず、夜昼、精進潔斎をして、世間の仏神に願を立てまどへど、音にも聞えず。妻は三人なむありけるを、よろしく思ひけるには、「なほ世に経じとなむ思ふ」とふたりにはいひけり。かぎりなく思ひて子どもなどあるには、(c)ちりばかりもさるけしきも見せざりけり。このことをかけてもいはば、女も、いみじと思ふべし。われも、えかくなるまじき心地のしければ、寄りだに来で、にはかになむうせにける。

ともかくもなれ、「かくなむ思ふ」ともいはざりけることのいみじきことを思ひつつ泣きいられて、初瀬の御寺に、この妻まうでにけり。この少将は法師になりて、蓑ひとつをうち着て、世間世界を行ひありきて、初瀬の御寺に行ふほどになむあり

ける。局近うゐて行へば、この女、導師にいふやう、「この人かくなりにたるを、生きて世にあるものならば、いまひとたびあひ見せたまへ。身を投げ死にたるものならば、その道なしたまへ。さてなむ死にたりとも、この人のあらむやうを、夢にてもうつつにても、聞き見せたまへ」といひて、わが装束、上下、帯、太刀まで、みな誦経にしけり。みづからも申しもやらず泣きけり。はじめは、「なに人のまうでたるらむ」と聞きゐたるに、わが上をかく申しつつ、わが装束などをかく誦経にするを見るに、心も肝もなく、悲しきこと、ものに似ず。「走りやいでなまし」と千たび思ひけれども、思ひかへし思ひかへしゐて、夜ひと夜泣きあかしけり。わが妻子どもの泣く泣く申す声どもも聞ゆ。いといみじき心地しけり。されど念じて泣きあかして、朝に見れば、蓑もなにも涙のかかりたる所は、血の涙にてなむありける。「いみじう泣けば、血の涙といふものはあるものになむありける」とぞいひける。「そのをりなむ走りもいでぬべき心地せし」とぞ、のちにいひける。

かかれどなほえ聞かず、御はてになりて、御ぶくぬぎに、よろづの殿上人川原にいでたるに、童のことやうなるなむ、柏に書きたる文をもて来たる。とりて見れば、

(d) みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかはきだにせよ

とありければ、この良少将の手に見なしつ。「いづら」といひて、もて来し人を世界にもとむれど、なし。法師になりたるべしとは、これにてなむみな人知りにける。されど、いづくにかあらむといふこと、さらにえ知らず。

（『大和物語』による）

＊深草の帝――仁明天皇（八一〇～八五〇、在位八三三～八五〇）。第五四代天皇。

＊良少将――良岑宗貞（八一六～八九〇）。父安世は、桓武天皇の子で、仁明天皇の従弟に当たる。法名は、遍昭。

＊誦経――読経のためのお布施。

＊御ぶくぬぎ――喪服を脱ぐこと。

問一　傍線部(ア)～(ウ)を現代語訳しなさい。

問二　傍線部(a)(b)には掛詞が用いられている。それぞれ掛詞を踏まえて現代語訳しなさい。

問三　傍線部(c)について、次の（1）（2）に答えなさい。

（1）　指示語の内容を明らかにして、現代語訳しなさい。

（2）　なぜ傍線部(c)のような行動を取ったのか、わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部(d)を現代語訳しなさい。その際、「花の衣」「苔の袂」がどのようなものを示すか明確にすること。

Ⅳ

次の文章は、魏晋南北朝時代の幽霊譚を集めた『幽明録』の一節です。これを読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所があります。

項県民姚牛、年十余歳、(1)父為郷人所殺。牛売衣物市刀戟、図欲報讐。後在県署前相遇、手刃之於衆中。吏捕得、令深矜孝節、為推遷其事。牛会赦得免。(2)

令後出猟、逐鹿入草中。有古深穽数処、馬将趣之。忽見一公挙杖撃馬。馬驚避、不得及鹿。令怒、引弓将射之。公曰、「此中有穽。恐君堕耳。」令曰、「汝為何人。」翁跪曰、「姚牛父也。感君活牛、故来謝恩。」因滅不見。(3)(4)(5)

（『幽明録』による）

＊項県――今の河南省項城市。
＊刀戟――刀や矛。
＊県署――県の役所。
＊衆中――多くの人がみているなかで。
＊令――県の長官。
＊推遷――審理を延期する。
＊深穽――獣を捕獲するために掘った深い落とし穴。
＊一公――一人の老人。

問一　傍線部(1)「父為郷人所殺」を、すべて平仮名を用いて読み下しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問二　傍線部(2)「孝節」とは具体的に何を指しているのか、わかりやすく説明しなさい。

問三　傍線部(3)「挙杖撃馬」とあるが、老人がこのような行動を取ったのはなぜか、その時の状況をふまえて説明しなさい。

問四　傍線部(4)「令怒、引弓将射之」を「之」の内容を示しながら現代語訳しなさい。

問五　傍線部(5)「恩」とは具体的に何を指しているのか、本文全体をふまえてわかりやすく説明しなさい。